

鉄腕アトムと風の又三郎の未来

板東 浩

「鉄腕アトム、ウルトラマン、スーパーマンは、どの順番に強いのだろうか？」

中学生の頃、こんなクイズで友人と遊んでいたのを思い出す。当時の懐かしい情景が、先日、三十年ぶりに私の脳裏に甦ってきた。

そのきっかけは、鉄腕アトムの誕生日が平成十五年四月七日だったから。コインの発行など記念イベントが全国で行われ、ご覧になった方も多いだろう。日本初のアニメとして四十年前に絶大な人気を博した「鉄腕アトム」。それにしても、あの時代に描かれた未来の姿は本当に凄い。手塚治虫先生は時空を自由に越えられる宇宙人で、電波望遠鏡で将来を透視できていたのかもしれない。その夢の世界が、しだいに現実のものとなり、すべてが変わりつつある。しかし、鉄腕アトムはいつまでも変わらず、強く優しいヒーローとしてグローバルに生き続けていくだろう。

さて、四月中旬のこと。ちょうど銀座で、古き良き時代の演劇を観る機会に恵まれた。劇団未来劇場創立四十五周年・第八十回記念公演の「艶笑綺譚 ミュージカル風 風の又三郎の桃色遊戯」である。風の又三郎と鞍馬天狗を演じるのは、水森亜土さん。音楽は小林亜星さん、脚本・演出は当初から長年担当している里吉しげみさん。水森さんが妖精のような衣装に包まれて登場だ。雰囲気はピンク色で、その仕草がとても可愛らしい。

宮沢賢治が描いた「風の又三郎」がさっそく始まる。九月一日
どっどどどどどど どどどど どどど、青いくるみも吹きとばせ

すっぱいくわりんもふきとばせ どっどどどどどどど どどどど どどどど

谷川の岸に小さな学校がありました。……

その舞台には、エロチシズムやミュージカルが併せ持つ独特の世界が広がる。色気や推理劇のバランスがちょうどよい。この程度の表現が、私には魅力的に感じる。言葉や演技、音楽に含みを持たせ、自分がイメージを膨らませる余裕があるからだ。

しかし、半世紀前には、その濃厚なエロチシズムが未来劇場の売りの一つで、時代を先取りしていたという。その後、社会が大きく変遷を遂げていくとともに、今ではむしろ上品過ぎるレベルとなってしまった。演出は不変でも、受け手の感性や価値観が変われば、評価は大きく異なってしまう。本劇を二十一〜三十歳代が観た場合、風の又三郎を理解し共感できるだろうか？ おそらく感想は「古くてダサイ」。四十一〜五十歳代なら「ワカル」、六十一〜七十歳代なら「懐かしい青春を思い出す」となるかもしれない。何はともあれ、このスタイルをずっと継続し、人々に未来への希望を与えてきたことに、拍手を送りたい。未来を志向しながら、パフォーマンズは変革し続けていく。ただし、その変化は直線ではなく、人間の細胞のDNAのように、螺旋の構造ではないかと思う。丸い螺旋階段を昇っていくと、ある周期で原点の上を通過する。ステップは一段ずつでも、遠くからみれば、一階ずつ高いフロアに達し、進化し続けるのではないだろうか？

PS…文頭の問いに対する回答例を示す。アトムとは原子 (atom) で、存在が認識できないほど小さいもの。ウルトラとスーパーについては、電波で説明する。テレビのチャンネルは1〜12がVHF、13〜62がUHF。HF (high frequency) とは「周波数が多い短波」のこと。HFの頭にV (very)、U (ultra)、S (super) をつけると、VHF: 超短波、UHF: 極超短波、SHF: 極々超短波となる。従って、veryは超、ウルトラは極超、スーパーは極々超との訳。以上より三人を強い順に並べると、スーパーマン、ウルトラマン、鉄腕アトムとなる。スーパーマンは「超人」ではなく、「極々超人」となるわけ。